平成15年度英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」　　番号　１５０４４

研究テーマ：　自信を持って音読させ、コミュニケーションにつなげるための指導の工夫

所属　中土佐町立上ノ加江中学校
氏名　戸田　祥代
ＲＧ　JH １

１．研究の背景

本校は中土佐町に位置し、全校生徒58名、3学級の小規模校である。私自身赴任してきたばかりで、生徒の状態や地域について、まだ十分に分かっていない部分もあるが、生徒は全体的に素直で明るい。限られた地域の中でずっと育ってきているせいなのか、素直ではあるが、学習に対する欲があまりなく、できる力はあるのに適当なところで満足している生徒も多い。英語の授業はすべてＴＴで行われており、比較的個々の生徒に目が届きやすい環境にある。授業の雰囲気は、学年によってかなり異なるが、授業の中で気になっていたのは、1年生と3年生の音読の声の小ささであった。興味関心がありながらまだまだ英語を声に出すことについて遠慮がちな1年生。3年生はまだしも、1年生はもっと元気な声が出てもよいのではないか。そんな思いから、主に1年生を対象としてリサーチクエスチョンを考えてみることにした。

２．予備調査

①　英語科授業アンケート（資料）

- 活動や発表がしやすい雰囲気作りができていないことがわかった。
- 英語に対する興味や関心がまだ芽生えていない。
- 教科書の本文を自信をもって読める生徒は半数以下である。
- 好きな活動は「話す」「書く」で表現をする活動は嫌いではないことが分かった。
- 「読む」ことに対する楽しさが感じられず、文字に対する抵抗もあるのではないか、と考えた。
- ｸﾗｽの3分の２は自信を持って声を出せず、恥ずかしさや抵抗が感じられる。

②　観察

- 初めて発音する単語や文に戸惑い、最初は声が小さいが、回数を追うごとに大きくなる。
- Ｔ１、Ｔ２の対話による導入では、大まかに話の内容をつかむことができる。
- 同じような内容の対話をＣＤで流すと、速さに戸惑い内容がつかめなくなる生徒が多い。
- 小ｸﾞﾙｰﾌﾟでの活動はできるが、積極的に人前で発表ができる生徒は少ない。
- 個人練習のときに読み方についての質問がとても多い。

③　定期テスト

- 英作文でI'm～と答えるべきところをI～と書いた生徒が予想以上にいた。また、This is~と答えるところを This～と書いた生徒も多かった。まだまだ読み方が浅く、生徒の中では曖昧な発音で終わっていることが分かった。
- 文を書かせると、語順が日本語のとおりになっている生徒が5人ほどいた。
- リスニングは単文のものはよくできているが、まとまった文を聞き取ることは不十分である。

３．リサーチクエスチョン

２．の予備調査の結果から、1年生にとってまだ英語の音や文字は十分に慣れていない状態であり、自信をもって声を出せない。「話す」ことでは発音が曖昧でもなんとなく意味が伝わっていたものが、書かせてみるとはっきりとした形で音読の不十分さが現れていた。また、人前で表現をすることに対する恥ずかしさや抵抗があり、授業自体にもその雰囲気作りが不十分であることが分かった。

音読の指導をどのように発展させていけば、表現力を高めることにつながっていくか。

４．仮説の設定

仮説１　範読のステップを細かくして、リピートしやすくし、何度も声に出す機会をつくる。
仮説２　内容をしっかり把握させると読解力もつき、ﾌﾚｰｽﾞが会話の中で生きてくるのではないか。
仮説３　音読での目標を提示すれば、読むことに対する目的意識を持てるのではないか。また、教師やパー

トナーの評価を返すと生徒の励みになり表現しやすくなるのではないか。
仮説４　定期的に発表の場を設けると、生徒の動機付けになるのではないか。

５．計画の実践
① ｽﾋﾟｰﾄﾞや区切れをｽﾃｯﾌﾟｱｯﾌﾟさせる形で、ペア練習の前に５回は全体で音読練習をする。
② 内容把握のための観点を与える。T or F,　Q and A を毎時間取り入れる。
③ Reading Card（音読に関する自己評価表）の活用。（資料）
④ ｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄの実施（ALT、T２の協力を得る）（資料）

６．計画の結果
① 細かい段階を踏むことで、個人練習やペア練習で読むときの質問が減り、教えあう姿もみられるようになった。
② 内容把握のための観点をあらかじめ与えておくことで、生徒はポイントを絞って聞き取り、読み取りができるようになった。細かい点での聞き取り、読み取りはまだ困難な生徒もいるが、T or F では後半かなりの生徒が全問正解できるようになって来た。Q and A は最初は CD 添付の日本語編で、次時の復習の時間に英語編を行うようにした。日本語編ではほとんどの生徒が答えることができるが、新出単語の音が十分定着していないときに間違いや回答できない場面があった。英語での Q and A は完全な答えにはならないものの、質問を理解し、答えることができ始めた。
③ Reading Card の活用では、必ず教師か友だちの誰かに音読を聞いてもらうことを条件とし、設定された時間の中で、提示された１～５の目標を選んで音読に取り組んだ。最初はやはり時間を要したが、徐々に慣れ、設定時間内にほとんどの生徒が目標１の「ふりがなを振らずに読める」を達成できた。また、それぞれの段階をクリアした生徒は次の目標に向かって練習する姿が見られた。教師の評価や友達の評価はやはり励みになるようで、「もう一回聞いて」「練習してくる」という声も多くなってきた。また、ｱｲｺﾝﾀｸﾄの指導もこの時行い、かなり定着してきた。ただ小集団の中での活動では活気がでてきたものの、自主的に人前で発表するとなると、限られた生徒になってしまったのは残念だ。
④ ｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄの実施はﾃｽﾄとして、行ったのは 1 回だけである。3 人称単数現在形を扱う単元のまとめとして、友だちや家族、好きなﾀﾚﾝﾄの中の一人を、それぞれ ALT に紹介した。初めて 1 対 1 で ALT と対話するとあってか、文を作るときから普段以上に意欲的に取り組む生徒が多かった。本番では ALT にｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄの評価表に生徒一人一人に直接評価してもらった。それぞれ緊張はしたようだが、ALT と会話ができたことは多少なりとも自信になり、対話することの楽しさを味わえたようである。ｱｲｺﾝﾀｸﾄもほとんどの生徒が意識していた。心配していた生徒が笑顔で ALT と会話をしている姿が見られたのがうれしかった。

７．結果の検証
最近の授業の様子では、音読の声は大きくなり、うつむき加減な生徒の数も少なくなってきたように思う。ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞｶｰﾄﾞも音読に対する動機付けや意欲付けには効果があった。しかし、ｱﾝｹｰﾄの結果からﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞｶｰﾄﾞも生徒に全面的に受け入れられたが、音読に対する意識の変化がその時だけの一時的なもので終わり、会話の内容を考えたものにまで発展しなかったことがわかった。また、音読に対する実践の中で、「聞くこと」には定期ﾃｽﾄなどの結果から、一定の成果があったように思う。ポイントを聞き取ることができつつあるように思う。「話すこと」に関わるｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄについては、やはり英語が言葉であることを肌で感じてもらえたと思うし、対話する喜びも味わえて生徒の心理的な面でも大きな収穫があったのではないだろうか。定期的に続けていきたい活動である。今回の実践で「書くこと」の表現力にはこれといった成果を得られるような結果が出なかったのは残念である。

８．成果と課題
音読から表現力をつけようとリサーチクエスチョンを設定したが、一部の生徒は自分のことに置き換えて表現する段階までできたが、ほとんどが音読が「教科書を読める」という段階でストップしてしまい、自己表現につなげていく作業にもう少し丁寧なｽﾃｯﾌﾟが必要であったと反省している。実践期間が 2 学期だけという短い期間のものなので、もう少し続けて検証してみたい。成果としては、音読の指導が「聞くこと」には少し成果がみられたことと、ｽﾋﾟｰｷﾝｸﾞﾃｽﾄで生徒が会話する喜びを感じてくれたこと、またやってみたいと

いう意欲につながったことである。会話してみたい、伝えてみたいという意欲を糧にして、「聞く」「話す」「読む」「書く」がうまくリンクしていけるようなリサーチクエスチョンを実践していきたい。